支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

「田植えの思い出」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

昔の田植え風景です。朝ご飯前から大勢の人たちが田んぼに入り、腰を曲げながら田んぼ面に引かれた線に合わせて、ひと苗ずつ植えていました。

手に持った苗束から、ひと苗ずつ分けながら植え、手に苗束が無くなったところで、近くに配置されている苗束を取って、また植え始めるわけです。

さらに、田んぼのくろ（人一人がやっと歩ける、田んぼと田んぼの間の細いあぜ道）を往復しながら苗束を運び、手植えしている人に都合がいいように、適当な間隔に苗を投げて配置する役割の人もいました。

その一人が、しげお少年です。苗束を両手に持ち、細いくろの上を時々よろけつつ小走りしながら運んでいき、一束ずつ投げていくわけです。アンダースローで…。

投げ方が悪いと、植える人がほしいところに苗が無く、あるところまでぬかるんだ田んぼの中を移動することになります。

しげお少年にとって、その苗投げはそこそこ得意だったのですが、失敗したときは元気な植え手の人に、「ほごのわらすこ！すっかりなげねど、だめだべ！（そこのチビ！、しっかりなげないとだめだ）」などと叱られたものです。

機械による田植えが主流となった今では、すっかり見られなくなった風景です。今はわずかに、神事やイベントで早乙女の田植えの姿が見られるだけです。とにかく、頭数の必要な昔の農作業の最たるものでした。そして、これは一年のうち何度かあるわが家の「家族総動員令」の一つでした。

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める